
牢獄。

イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牢獄。

【Nコード】

N9884X

【作者名】

イツキ

【あらすじ】

牢獄、といえば。それはもちろん、鉄格子と石の壁に囲まれた薄暗い場所をイメージするだろう。けれど、俺達の場合は違う。都内の地上13階、見晴らしのいいこのマンションの部屋。光に溢れたこの場所こそが、俺とユキの　　牢獄なのだ。

.....

初作品、更新は今のところ平均4〜5日で1話投稿中。携帯の仕

様上約5000文字ずつ。完成させてあげたいと思いますのでぜひ
よろしく願います。

パートB以降から（読む方によっては拙すぎて何も感じないほど弱い）性的描写があります。ご注意ください。

パートA - 1 (前書き)

パートA - 1。

冒頭と馴れ初めです。

シナップスはよく行く近場の店から名前を借りて……いや、パクツテ
マセンヨ？

パートA - 1

馴れ初め、と呼ぶには重すぎる。

初めに思い浮かんだそんな感想を、今、ここで、不意にもう一度思い浮かべた。

「 シュンさん」

優しく囁く甘い声。

俺の名を呼ぶ、女の子のような高い声。

「 ユキ」

返す俺をはにかんで受け、少年はそつと体を重ねる。細く美しい肢体が糸のように絡みつき、ふわりと香る薔薇が意識を急激に奪い去っていく。

申し訳ない気持ちになりながら、ユキの体に大きな手で触れた。骨と筋肉でゴツゴツしたそれを少年は嬉しそうに受け入れ、自ら秘部へ誘い込む。白くすべすべとした肌に這われただけで唇からエクスタシーの混じる吐息が漏れ出た。

「んっ あん 「その艶やかな音。恍惚とした表情。俺はそれに誘われるように動きを速めていく。

ユキのイイ所は全て知っている。ユキが喜ぶことも、ユキが嫌がることも、ユキが欲しがること。全て知っている。

「 シュン、さん…ふあっ…」

ユキ。

俺の ユキ。

愛しくて仕方がない、俺のユキ。

少年が何故メイド服を着て俺のベッドの上で密事に興じているのか。その始まりを俺は、もう一度だけ思い出していた。

ユキと出会ったのは、大体一年前。俺はその時何の変哲もない大学生であり、ユキは何の変哲もない高校生だった。

…いや。

何の変哲もないわけではなかった。正確に言えば、片や『ただの一企業の社長を務めている』大学生、片や『全国ボーカルグランプリ優勝候補の』高校生。それ以外には『何の変哲もない』2人だった。一企業の社長になったのは色々ややこしい事情があるので割愛するが、とにかく俺はそこで実地経験を積むために働いていた。頂点に立つ者として把握しておかなければならないものは経済的な動きやライバル企業の集客策ばかりではなく、むしろ自社の底辺がどのような仕事をしているかの認識や客からの直の要望を聞くことだと思っていたからだ。

その仕事とは、受付。および、調理。

…俺は、とあるカラオケ店の社長なのだ。

そのカラオケ店は名を『シナップス』というのだが（パクリではないぞ！）、そこは5歳の子供連れ親子から帰宅途中の学生、ラッパーのあんちゃんからお爺ちゃんお婆ちゃんまで 誰もが安心して集えるとそれなりに評判な店だった。機種も大手に対応して四種類は確保してあり、来月には最新機種を導入してみようと思ってる。

そしてこの店に集まる人々が誰彼問わず囁き頭を捻る噂がある。

『七色の天使達』が、いるらしい。

『七色の天使達』とは勿論本当に天使がいたというわけではない。それが意味するのは『七色の声を持ち、天使のような歌を響かせる何者かがいる』ということだ。窓もドアも黒塗りにされ中が見えないようになっていいるスペシャルルーム。通常料金と一時間毎に百円

を上乗せして払わなければならないこの特殊な部屋。その中でも最も音質が良いとされる、シナップス二階最奥部に潜むX2-1号室。そこに何者かがいるらしい、と。

無駄に広く輝かしいホールのような受付や廊下ですれ違い様に話を聞く度に、俺は笑いたくなるのを必死にこらえた。客が噂するには『歌手の　さんとxxさんがお忍びで来ているのかもしれない』とか『アイドルグループの　が練習しているに違いない』とか。違う、全くもって違う。

「よっこらせ」

「お、社長。お疲れさんですー」

「ああ。何か運んできたのか？」

「はい、N1-3にピザを六枚ほど。本当に子供ってよく食べますよねー」

「確かに。…まあ、叫ぶからな」

バイトで働いている学生の軽いノリにいつものように返答し、スタッフルームに入って監視カメラの映像をぼんやりと眺める。画質の悪い小さなテレビの中には様々な人間が映っているが、この時間には俺の視線はいつもある部屋に集中していた。

「社長はいつもの通りっすか？」

「おう。今日も『からあげ丼』と『牛乳』だよ。あ、今から観察タイムな」

「了解っすー。いやあ、しかし…可愛いっすよね、X2-1の子」

「ま、確かにな。だが葦原さんは男だぞ。間違っつて口説いたりするなよ」

「あはは、それはないっすね！俺はお姉さんタイプにしか興味ないんでー」

「…初耳なんだが」

X2-1号室では、たった一人の少年がもくもくと丼を抱え口を動かしていた。小さな体に次々にからあげとご飯を流し込むような動きは見えていて清々しい。マニュアル通りに作ったとはいえ嬉しいも

のだ。

少年の名は葦原有希。葦原は17歳の男子高校生でありながらほぼ毎日この部屋に入り浸るカラオケ大好きっ子であり、見た目がどこからどう見ても美少女であるにも関わらず無愛想で無口な人間だ。2ヶ月前からずっとここを根城にして歌を歌い続けており、その容姿と歌の上手さ、意外な真面目さで従業員からは人気を博している。葦原は朝9時にやって来る俺を必ず待つており、開店時間が待てないから入れてほしいと毎日せがむのだ。11時開店なのに2時間も前からいる理由を聞いたがだんまりであり、代わりにいつも熱心な視線を投げかけてくる。その破壊力は通常の上目遣い女子の比ではない。無言だがイイ。ぐつと来るのだ。店に入れてやると自主的にX2-1号室から掃除を始め、店内清掃や機械整備を手伝う。お返しに小遣いをやるとちよつとだけ嬉しそうに笑ってくれるのがものすごく可愛かったのは内緒。

朝10時から従業員がちらほら集まり始める頃、葦原は必ず部屋で発声練習をしている。ここで最終的に声を出して、その日にどんな歌を歌うかを決めるらしい。一度覗いてみたらちよつとドアの真ん前に立っていたらしく、後ろからキツイ衝撃を与えてしまった。したら3日間ほど連続で朝は睨まれた。

そして開店時間。

X2-1号室に、天使が舞い降りる。

そう。天使の正体は、その少年。この葦原有希という高校生は類い希なる才を持ち、低音域から高音域まであらゆる曲を歌いこなすのだ。少年はたった一人で何人もの声を持ち、朝から晩まで歌いきり、平然とした顔で金を払って帰っていく。

そんな少年だったのだ。

「いつも思うんだが…葦原さん、学校はどうしてるんだろうな」

「あー、確かに。まあ少なくとも真面目に出てはいないのは丸分かりっすよね」

「…サボリ？」

「だと思えますねー…あ、食べ終わった」

井をぺろりと平らげた少年は次にジヨッキを掴み、中にたつぷりと注がれている牛乳をぐびぐびと飲んでいく。ノンストップ、躊躇いなし、とにかく思いきり。勢いだけでジヨッキを飲み干すその姿はかなり妖艶だ。何せ下手な女子より可愛い子が、眉を多少曲げてはいるが小さな唇で白濁液を飲み込んでいくのだ。おかげで自然と色つばい妄想を繰り広げてしまった。

食べ終わった二品は机に放置し、マイクを片手に立ち上がって伸びをしたり発声したり。そうして機械をちょんちょん弄り、音に合わせて歌い始める。その繰り返しだ。

「昼夜必ずからあげ井と牛乳食っててよく飽きないっすよねー。しかも太らない！羨ましいかぎりっす！」

「…あんなカロリーとってんのに細いままだかな。ちょっと心配だわ」

「社長はムキムキっすもんねー」

「いや俺は人並みだから！」

その日も朝から普通に出勤、普通に葦原さんを入店させ、普通に業務。厨房で作ったからあげ井と牛乳をトレイに乗せ部屋に運べば、待ち構えたようにソファに腰掛けた少年がいた。小休憩にと楽典を開き読んでいる。真剣な瞳だ。

「お待たせ致しました、からあげ井と牛乳です」

「ん…ありがとう」

目を上げた葦原さんはドキツとするくらい美形だ。美少年…いや、美少女だといっても差し支えない。柔らかそうな頬は真白く雪のようで、かすかに朱がさしているのは歌唱による熱のせいだろうか。潤む瞳はどこまでも黒く輝き、吸い込まれてしまいそうになる。髪はショートだが無造作に弄られており、絶妙なワイルドさがかえて女の子らしさを引き立ててしまっていた。

俺は井とジヨッキを置いていつもの通り部屋を出ようとして、ふと葦原さんがじつとこちらを見ていることに気づいた。

「…どうかしましたか？」

少年はしばらくこちらをじっと見つめ続けていたが、やがて小さくため息をついた。

「…何でいつも、あなたなの」

「あ、気づいてましたか？」

「…今、ふと思っただけ」

静かな口調にはツンデレ要素が少しだけ混じっていた気がした。黙って笑顔で見つめていると「…やっぱり何でもない」と言っただけを抱える。何故だかよく分からないが俺もソファに座って葦原さんを見つめ続けてしまった。

こうして見るとやはり可愛らしい。そして男とは思えない骨格をしている。細い指先はしなやかに長くも、井を支える手は小さい。腕には筋肉はあまりついておらず、そのまま撫で肩へと視線が行く。早春に合わせた白い長袖Tシャツはサイズが大きいものをわざとチョイスしたらしく、だぼだぼだが着心地は良さそうだ。首元から覗く鎖骨がセクシーだと思ってしまった。

服のせいで胴は分からないが、この様子なら恐らく細いのだろう。透明な机のおかげでジーンズを履いた脚が見える。内股だ。こちらは使い古された物らしく所々に何故か絵の具がついていた。靴は普通のスニーカーだが年季の入った感じが伺えた。

「……………」

そこまでじっくり観察していたら葦原さんはジト目を向けてきた。

「あ、いや、すみませぬ」

「あげないよ」

「…え？」

「これはぼくのだから。あげない」

そういつて井をギュツと抱える。その表情が強気ながらも一生懸命で、俺は笑いをこらえることが出来なかった。一気に気持ちが悪くなったのだ。

「ははっ…そんなつもりじゃないよ」

それでも頑なに井を抱えて訝しげな視線を送る少年。態度も容姿も可愛くて仕方がない。立ち上がり、ドアに手をかけ振り返る。まだ睨んでた。

「よし。葦原さんは常連だからな。そのからあげ井と牛乳は俺の奢りにしとくよ」

「えっ！…ホント？」

「俺は嘘ついたことないんだぜ」

「…あとで『お金無いから返せ』とか言わないよね？」

「ないない。つか俺は払わねえ。バイトの給料からちよつとだけ拝借してくるから。俺社長だし」

「…社長？」

首を傾げる動作があまりにテンプレすぎてやはり笑いをこらえられなかった。閉まる扉の隙間から少しだけ頬を膨らませた葦原さんが見えた。それだけだった。

その日を境に俺と有希は仲良くなっていった。仲良くなったとはいっても急に馴れ馴れしくなったわけではなく、昼食や晩飯を運ぶと二言三言交わすようになり、直近の駅から出てくる俺を見たのか朝も店の前で待たずに駅から一緒に歩いてくるようになった。相変わらずあまり喋らず何を考えているのかよく分からないが、有希の纏う空気はそのまま心地よかった。ちなみに名前でも良くも悪くもなかったのは、名字も『さん付け』も要らない、有希でいいと言われたからだ。少し驚いたが、理由は簡単。

「シユンさんが『さん付け』とか…普通の人より何倍も気持ち悪いから」

有希、もう少しオブラートに包んでくれ。

夏場を迎え、有希との出会いから半年ほど経過した。例年に比べて今年は梅雨前線が異常発達したらしく、7月のシナップスは何度も大雨に見舞われた。客足が途絶えたり急増したりと忙しい中、有希はそれでも毎日俺と共に店に来ていた。従業員の中では新しく入っ

たバイトの学生に接客の難しさを体感させる役を受け持ってもらったことでさらに人気が増しており、新人のフロアマネジメントのお姉さんも気に入っている様子。俺としては文句なしだ。

雨に合わせて傘を持つ姿も変わらず小さくて可愛らしい。少しだけお喋りも得意になったらしく、俺が顔を向けると何か話し始める。

始まりが「あのさ」なのが有希らしいが中身は意外にも政治や経済の話が多かった。勿論歌に関することも多かったが少し意外だった。「なあ、有希。気になってたんだけどさ」

「…？」

8月に入った朝、俺は前から気になっていたことを聞いてみた。明るい青空を目にしているというのに何故だかネガティブな気持ちになる。きつと聞いてはいけないと自ら思っていたんだろう。

「家とか学校…どうしてるんだ？」

「…」

急に空気が凍った気がした。

パートA - 2 (前書き)

パートA - 2。

色々と分からない部分があると思いますが追々明かしていきますので少々お待ちくださいm () m () m

パートA - 2

有希は立ち止まり、何度かこちらを見上げた。視線はコンクリートにぶつかったり、ガードレールで留まったり、俺の目を一瞬見えずぐに下げてしまったり。こんな態度が出てしまうなんて余程言いにくいのだろう。だが、俺は心配だ。

「…家のことは、もうちょっとだけ。…待ってほしい」

ややあつてやつとそれだけ言う。固い唇を何とか動かしたまま俯いた顔の色は分らない。それでも、その姿は俺に十分な印象を与えた。

同時に、思う。

(…有希から目を離したら、ダメだ)

何があつたかは分からないが、よほど大変なことなのだ。有希がその重圧に押し潰されてしまう前に俺が見つけてやらなければならぬ。何となくそんな気がした。

少年は少し大きな呼吸を繰り返し、ほっと息をつく。ようやく持ち上がった顔はいつもと同じ無愛想なむすっとしたそれだ。

「学校は、行つてない。…中退したから」

「中退？」

「ん」

短く頷く有希と再び歩き出す。何だか今度はやけに暑い。炎天下でもないのに背中や額に汗が滲み出し、居心地が悪くて仕方がなかった。

空を見上げると雲がぼつんと浮いていた。上空では速い風が吹いているらしく、羊のようなそれは俺達の進行方向とは逆に流れ去っていく。最初は塊の大きな雲だと思っていたが、風に煽られるうちにそれはゆっくりと二つに別れていたらしかった。雲の下から見ると割れ目の中に青空が顔を覗かせている。その色がやけに鮮やかに見えて背中が冷える。

「高校、面白くなかったから」

「…そうか。なら仕方ないな」

「怒らないの？」

見上げる有希の頭を撫でると、「子供扱いしないで」とキツイハタキ攻撃を腕に浴びせられた。ビシツと綺麗な音と共に腕がじわりと赤らむ。なかなか痛い。

「怒らないっていうか、怒れないって感じだな…俺も中退こそしてないが、つまんねえとは思ってたからな」

高校では帰宅部に所属していた俺としては至極真つ当な感想だろう。趣味でたまにカラオケに行く以外は勉強とバイトしかしていなかったのだ、高校生としての青春を謳歌することなど一度足りとてなかった。

確かに文化祭や体育祭でそれなりに『アツ』くなつたことはある。

俺の母校は男子校のために体育祭の盛り上がりは凄い。男達が本気でぶつかる様は迫力もあるし、地元民や新聞記者からも「見ていてワクワクする」とお褒めを頂いていた。

文化祭だって負けていない。生徒の自主性に全てを任せた学校側の計らいでほとんどのクラスがやりたいことを出来る。屋内ジェットコースターを作ったり、ピザを一から作って焼いたり、あるいはテレビ番組のような力自慢大会やチアリーディング、バンド演奏に演劇と様々な催しが為された。入場者数も年を重ねる事に上がっており去年は1万人を超えたらしい。これらを企画・準備するのに熱くならない男はいないとまで言われている。

だが、それは間違いだ。

体育祭と文化祭を見に来た人間のほとんどが気づいていない。熱闘を繰り広げる生徒達の大多数は、その自分に酔っている。そして少しでもカツコイイ所を世間に知らしめ、足りないものを補おうとしている。その足りないものとは勿論　女子のことだ。

「体育祭も文化祭も、根っから楽しもってヤツと出会えたことがなくってな。というかもうあの高校全体が『そういう雰囲気』だっ

たんだよ。だから俺はいつも冷めた目で見てたよ…つまんねえつてな」

そんなに自分を良く見せたいのか、と。

年頃の男としては珍しく、俺は同世代の女子には興味を持ってなかった。当然のことながら可愛い子には『可愛い』と感想を抱くことが出来たものの、だからといってそれが恋愛感情にまで発展したことは一度もない。そのおかげで彼女が居たことなどもないのだ。寂しい？いいや、気楽でいい。

所詮は女子も同じ生き物だ。いかに自分を良く見せるか。それを日常的に実践し、その結果が顔に表れているだけ。他に男との違いと言えば…同種の淘汰活動が激しいこと、義理や人情より欲望を優先すること、ぐらいだろうか。

とにかく俺は同世代の、というよりは現代の若者を心底嫌っていた。確かにバイトの学生や有希のように意外と馴染める人間も居る。しかし大半がそうだと気づいてからは何度か人間嫌いになりそうだった。その度に何とか“折り合い”をつけてきたものだ。

「…ふうん」

それだけ言った有希はふいつと視線を下げ、遠くに見える電車に当たった。俺が使っていない私鉄らしく、車体には俺の好きな赤紫色のラインが真っ直ぐ引かれている。それが俺自身のどんな記憶を探しても見つからず、不意にあんな電車は走っていただろうかなどと不安になってしまった。

「あのさ、シユンさん。…ぼくはね」

そこで一度区切った吐息は、やけに艶めかしかった。

「…ぼくはね、言い寄られたの」

「あー…そうだろうな」

「…クラス全員に」

「あー…っ、はあ!？」

思わず二度見してしまった。

クラス全員に言い寄られる？そんなことがあり得るのだろうか？

いや。有希なら…あり得るか？

「ぼくの学校は全日制普通科、偏差値はそんなに高くないけど生徒数ばかりが多いマンモス校で…1クラスに45人くらい居たかな」
有希はその学校の中でも比較的治安の良いクラスに入れられたらしい。他クラスには地元じゃ有名な不良も居たとかどうとか。それはまあ、別にどうでもいい。

その高校は俺と同じく男子校だったらしい。少年はその中で毎日を真面目に生きていたようだ。軽音楽部でボーカルを担当したり体育祭に向けて苦しい運動を頑張ったり。勉強もそこそこ出来たらしい。入学当初に出会った人や軽音楽部の仲間と友達になってそれなりな馬鹿もやったとか。

「…それで、さ。文化祭の催しで、女装コンテストみたいなのが開かれて」

全校生徒の中でも推薦者と挑戦者がペアを組んで優勝を競うよくあるイベントだが、そこで有希はある男子生徒と本気で女装したらしい。メイクもコスチュームも協力してもらってイメージ通りに作り、それなりにダイエツトも頑張った。勧められて参加した有希は負けず嫌いな一面をここで働かせ、自分で満足いく出来にしてみたという。

「…そしたら、優勝しちゃって。地元でも高校でも有名になって、なんか取材とか来て、友達が告白してきて…もう、怖くなっちゃって」

そこからは、推して知るべしなんだが。

有希の人気は圧倒的であり、男子校ということもあって多くの仲間が有希に女装を望んだそう。元々顔形が整っていた有希はそのまま登校しても可愛らしい少年なのか格好いい少女なのか分からないくらいに中性的であり、その中途半端な姿を焦れったく思ったんじゃないかと思う。「友達」は友ではなく、セクハラ強要者達と化したのだ。

塵も積もれば山となる、とはよく言ったものだ。その塵は良いもの

だろうが悪いものだろうが関係なく、積み上がった山となって少年を圧迫したのに違いない。最も彼らだって半分は冗談かもしれないが、冗談だって4人分も積もれば立派なトラウマとなる。取材など尚更だ。

有希は自分が男であることをいつも当然だと思い、それまではイケメンだとか何だとか騒がれるのも嫌いじゃなかったらしい。

「でも、今は違う。今は、人が怖い。他人がぼくを本当はどう思ってるか、それが分からなくて怖くて、たまらない」

男だと信じていたアイデンティティが周囲の全てから否定され、確立された知識が捨てられ、新たな役割を望まれる。

負けず嫌いは、えてして繊細な心を持ち合わせている。反抗することと己を奮い立たせ牙を剥く生き物だ。それが、反抗することも適わない群と敵対したらどうなるだろう。

答えは簡単。立ち向かって死ぬか、逃げてそれを忘れたかのように生きるか。その2つしかない。有希にはどっちも最悪の選択だったんだろう。どちらにせよアイデンティティの崩壊は免れないし、一生物の傷がつく可能性だってないとは言い切れない。

それに、繊細な心というものは酷く傷つきやすい。ガラスのハートなんてモンじゃない。それはぐらつくジェンガのような、並べ途中のドミノのような、触れれば直すのに時間のかかる大きなミスとなる。事によっては個々のピースに傷がついたり、ピース自体を失ってしまつて二度と元に戻らないかもしれない。

もちろん、埋め合わせの利く物質なら大丈夫だろう。けれど、人間の心は違う。

そうして逃げてきた先が、俺が経営するシナップスのX2-1号室というわけだ。ひとりでに得心して拳をポンと打つ。朝早くに来ていたのは、学校の登校時間なんじゃないだろうか？もしかして、家の人にはまだ、中退したことを言っていないんじゃないか？

「面白くない話で、ゴメン」

「へ？いや、俺は構わないよ。というか、聞きたかったことが半分

以上聞けたから満足だ」

はたかれたのを忘れた手でもう一度有希を撫でる。髪を荒立てないよう優しく、流すように。有希はほんのちよつとだけ赤くなり照れているようだった。直後、下からファニーボーンを直撃するアップパ―を見舞われたが。…すげえ痺れるな、ココ。

「…あのさ、シュンさん」

「なんだ、このナイスアップパーめ」

「なにそれ…」

有希は数歩先に歩み出るとクルリと振り返った。振り向きざまにふわりと舞う髪の毛の中に一瞬だけ見えた輝きは、当たり前といつては何だが暗黒だった。いつもモチベーションが低い割には瞳がキラキラしているのはどうということなんだろう。

その姿は先ほどの続きか、照れている。無表情だったアイツが眉尻を下げちよつと迷った素振りで見ているのは反則的に可愛い。頬に差す朱色はほんのり柔らかで、何故だか急に『食べたら美味しそうだな』という何とも不可思議な感想が思い浮かんだ。

「…シュンさんは、ぼくのこと。…どう、思ってる？」

息は、荒い。自分から言葉に詰まりつつ質問をしておきながら、きつと答えは知りたくないんだろう。トラウマというか何というか、人間って怖いなあなんて思う。

「んー…一概に言えば、大事な友達？」

「…本当？」

「当たり前だろうが。有希、言つとくけどな…俺は嘘ついたことないんだぜ！」

「その台詞、通算20回目だよ」

「…マジか？」

「ん」

またもコンクリートの上を歩き出す有希に慌ててついていく。夏の暑さはジリジリと肌を焼いていくが、この時はそれが気持ちよかった。

「…ありがとう」

「ん？何か言ったか？」

「…別に何も。あれ、もしかしてシユンさん、もうボケ始まっちゃったの？」

「勝手に人を年配者にするなよ…」

小さな感謝の声は、聞こえなかったことにした。

時間が経つのは、本当にあつという間だ。

つい先日までアスファルトを容赦なく照りつけていた陽光すらも気が緩んでいるんじゃないかと思うくらい涼しい日々が続くようになり、あの夏鳴いていた蝉達は幻のように消え去って。何となくまた雨の日が増えたと思ったたらお日様のサービスショーが1週間続き、青空に浮かぶ白雲は不安定な様子を苦々しげに隠蔽していく。

季節に合わせたメニューのチェックやアイデアと業績の情報交換会に何度か出席し、俺もさりげなく忙しくなっていく。シェア争いの激しい土地ではないのだが、他県の働きっぷりを聞いていると俺も何かしたくなつて、時たま有希にアドバイスを求めてみた。もちろんそこは流石の有希、秋なら定番の栗や芋を使ったデザート系を充実させるだけでなく、新たな利用コースの提案など有益なものも多く出る。社内会議で有希発案であるアイデアが実現された回数はずっと4回。どれもが俺の手柄になってしまっているのが心苦しかった。

そんな10月中旬、有希が待ち合わせ場所に来ないことがあった。不思議に思ったが携帯も繋がらず仕方なく店に向かう。何かあったのか？事故か？それとも家の人にバレたか？

…有希が心配で、たまらない。

にらめっこ中のハロウィン企画にも本腰を入れる気にならず、悶々と思考。カラアン、と乾いたベルと共に一瞬だけ外で降る雨の音が耳に届く。バイトはルーム掃除に向かったため仕方なく俺が受付に

出た。

「……って、有希？おま、びしょびしょじゃんか！あー、タオルタオル！」

受付に立った有希は傘もささずに来たらしく、びしょ濡れで立っていた。

パートA-3（前書き）

パートA-3。急展開です。

何というか、もう…色々とぐちゃぐちゃかもしれませんが、ホントすみませんorz

閲覧者の皆様、いつもありがとうございます！（*・、*）

受験勉強の片手間で書いていたのでプロットなるものが微塵も出ていません。頭の中で思い描いた単純なストーリーを頑張って書いております。通学途中の電車内で！

パートA - 3

ざあざあどけたたましく鳴り響く雨の音も今は聞こえないスタッフルーム。それなりに広い空間だが妙にごちゃごちゃして煩わしい場所でも、パイプ椅子に座ってじっとしている有希だけはとても綺麗だった。乾いたタオルで水分をなるべく拭き取った髪はそれでも尚艶やかで、薄い橙色の照明を物寂しげに反射させている。しっとりしながらクセのついてしまった外ハネが今日ほど女の子らしく見えたことはないだろう。なんて思ったのは、きつと普段の無表情さは縁遠い、今にも泣き出しそうな顔を見てしまったせいでもあるに違いない。

有希は手ぶらだった。普段雨が降ろうが雪が降ろうが（そして恐らく矢が降ろうが）持ってくるはずの楽典やらなんやらといった荷物は一切ない。何か持ってきてないのかと問いかけたらポケットから210円という小銭が出てきた。本気で丸腰らしい。

「…有希」

声をかけてみたが、こちらを向く素振りもない。おしとやかだとか静かな子が好きな人間ならきつと悶え死にそうなくらい可愛らしい姿なんだが、もうかれこれ1時間はだんまりを喰らっていた俺としてはそろそろ血管の1本や2本がプチンとイッてしまってもおかしくはなかった。合間合間で戻ってきた店員達もどうやら一瞬で空気を読む力が身につけてきたらしい、有希にフレンドリーに話しかけようとする馬鹿はいなかった。いやまあ、社長としては嬉しいんだが、こつも突破口が掴めないっていうのは…ちよつとどころかかなり苦しいな。

「…なあ、有希。何があつたんだ？もしかしてそれは俺にも話せないことなのか？」

「……………あ……………」

「あ？」「あ？」

「……何でも、ない……」

（ ……っ！イライラするっ…！ ）

俺は最終手段をとることにした。一度受付カウンターまで出ると客がいないのを確認し、ドリンクバーのグラスがしまつてある棚から2つのカップを取り出す。そのホットドリンク用のカップに普段はパフェなどにしか用いないチョコレートソースを注ぎ込んで、さらに「ヴィイイイ」と低い唸り声をあげる機械からホットココアを流し込む。ティースプーンでぐるぐるとかき混ぜながらダイエツト用シュガーを1本ずつ丸々溶かし、出来たそれをすぐさまスタップルームに持って帰った。

「ほれ」

なるべく勢いを殺して置いたカップの中身は文字通りチョコレートとココアを足して2で割ったような色のままぐるぐると渦を巻いていた。不思議そうにこちらを見た有希に「特製スイーツ（笑）」とか言ってみるが、もちろんその表情は冴えない。

「まあ有希、一口飲んでみる。ココアには精神をそれとなく落ち着ける効果がある」

「…へえ…」

「…かもしれない」

「…確定してないの？」

「俺式解釈だ、少なくとも俺は落ち着く」

んなムチャクチャな、などと呟く有希に俺は無理矢理カップを持たせた。白い湯気をもうもくとたてる特製ココアは見事に甘そうな黒さで輝いている。ダイエツトシュガーを入れたことは黙っていたのだが、有希はそれでも少しだけ苦々しげだ。中身の甘々な味で中和されるのを祈ろう。

口元にそれを、そつと、大事に運ぶ。怯えた野生動物が初めて水を与えられたかのような仕草で、ペろりとココアを舐め。

「…甘あっ！」

期待通りの反応。期待通りすぎてちょっとだけ笑ってしまった。

「ちょ…シユンさん！何これ！？こんな甘い知らない…うええ、舌先が痺れるくらい甘い…」

「はっはっは！俺専用ブレンドだ！インスリンが過労死しそうなくらい働いてるのが手に取るように分かるぜ！」

「っ…甘党にも、ほどがある…でしょ…」

「え、そうか？俺いつつもコレを飲みながら板チョコ食ったりキャラメル食ったりしてるぞ？」

「っ…！！…シユンさん…ヤバすぎる…」

仕方なしにドリンクバーからコンソメスープを注いできて飲ませたら、ものすごい勢いで怒られてしまった。塩味を得て回復した少年にガミガミ説教じみたことをされてはいるが、ついつい口元は笑んでしまう。

有希には様々な表情が必要だ。とりわけ、笑うこと。俺はそれなりにコイツと仲良くなつたつもりだったが、満面の笑顔というものは一度も見ることがない。

それはきつと、他の表情も忘れてしまったからだ。高校の事件以来失ってしまったであろう感情の表し方が俺の努力で蘇るか否かは定かではないが、こうして少しずつ濃い表情が出るようになっていと思う。

いや、まあ…ただ単にからかいたかったって気持ちもあるんだが。

「…何、笑ってるの」

あ、仏頂面に戻った。

「ああ…いやあ、有希がこんなに思いきつた感情を見せてくれるなんて思わなかったからさ。これからもからかい続けようかなって思ってたなら、つい」

「っ…！」

息を吸う音が聞こえた。火に油を注ぐような行為をしてしまったのかも知れない。だがまあ美少女みたいな美少年に怒られるという経験はなかなか出来ないことだ、若いうちに堪能しておこう！

それにしても、やはり声を鍛えているだけはある。有希の音量は凄まじく、狭いスタッフルームには怒声がこだましてぐわんぐわんとエコーが鳴っていた。近くの機器がピリピリと張り詰めた空気に耐えかねたように震えたのも分かったし、何より未だに少し頭がクラクラする。鼓膜には有希の高くてハッキリした声がぺったり張りついたままに違いないのだろう。いや、そんな言い方をすると何だか少しばかり淫らなイメージが膨らむな。…そんな俺は病気に違いないな、うん。

…そんなことを考えながら、ふと気づく。 有希が、怒らない。

「……つく…ひつく…」

「…え？」

視線を上げた先には、その綺麗だった瞳からボロボロと大粒の涙を零す少年が。

「有希？…お、おい、有希？」

意味が分からなくて、動揺。何だこれ、何でだこれ、どうして有希が大泣きしてる？

つい先ほどのやりとりはパツと頭に思い浮かぶのだが、何かマズいことを言った覚えは…えーと…多分、ない。からかったのが悪かったわけではなさそうなんだが…。

「悪かった、からかったのはゴメンな！ほら、これからはチビとかお子様とか言わないし、変な特製ジュースとか飲ませたりしないからさ！機嫌直せ！な！」

自分でもさりげなく酷いことをしてきたんじゃないかなんて考えってしまう。だが有希は涙を止めないまま、頭を横に振った。大粒の雫が宙へ舞う姿は綺麗だが、今の俺には全然喜べない。

「じゃあ何だ？有希は何が悲しいんだ？俺に出来ることなら何でも

っ
」

「ムリだよお…ひつく…」

「話せ！俺はな、お前が心配で心配でたまらねえんだよ！こんな形で『そうですか、はいサヨウナラ』なんて出来るわけねえだろうが！」

「だって、だって…シュンさんは優しいけど、優しいだけじゃ…ダメだもん！」

「だから！意味が分からねえって」

「ぼくはこれから…知らない男の人に、売られちゃうんだよおっ…！」

。

ん？

…え？

今、何て言った？

「…売られ、る？」

掠れた声と呼ぶにもおこがましい、魔物のような言葉の発音。俺の喉元を乾いた唾が落ちていく。有希の首が、本当に小さく、ゆっくりに、縦に振られた。

「人身売買なんて、聞いたこと…」

無い、とは言い切れなかった。業界で生きていると似たような話を小耳に挟むこともある。どこそのアイドルをいくらで取引して移籍させるだとか、一般人をスカウトして金を積んで無理矢理辱めるとか。もちろんそんな噂じみたことは確かめる術も何もなく、俺にとっても他人事だった。…たった数秒前までは。

っていうか信じられるか？人身売買だぞ？世界史とかファンタジーとかでよく見られたあんな非人道的なことが、この法律の整った安全な国、日本で行われるなんて。

そう。普通じゃ、考えられないんだ。

『普通』じゃ…考えられないんだが。

「…ウチは大きな借金を抱えてたの。…外国融資の、金利の高い会社に騙されて、お父さんが借りてて…そしたら昨日、お父さんがいなくなっちゃって…」

有希の家はすでに普通ではなかった。それは、俗にいう夜逃げというやつだろうか。行方を眩ませたところで借金は消えないし借金の取立もついてくる。恐らくその男のは最初から有希と母親が肩代わりしてくれることを狙っていたのだろう。

「お母さんはパニックになっちゃって、会社に電話して、直接話すつて。それで…変な契約書に、サインさせられて…お母さんはおかしくなっちゃって、会社の人が、明日、迎えに来ますつて…！」

それは…まさに身柄を売るという約束だったのだろう。ベタすぎる展開ではあるが、この世の中にはまさしくそうした古い契約方法を巧みに用いて人を騙くらかす奴らもいるものだ。そして、その迎えとは…言うまでもない。商品として有希は買われてしまうのだろう。

「…だから。だから、もう。ぼくは、ここに来れなくて。…夢も諦めて、シュンさんとも、会えなくて…これからなんて、もう…二度と、なくなつて…」

最後の方は尻すぼみになってしまい、同時に鼻水を嚙る音と混じつてよく聞こえなかった。涙も鼻水も止まらない少年はまたも黙ってしまった。俺もスケールのデカすぎる話にすっかり参ってしまった。客観的に言えば、これはとてつもなく荒唐無稽な話だ。今ここには証拠もないし、仮にそうだったとしてもここに居るのはバレていそうで恐ろしい。幸い窓も無いこのスタッフルームでは監視カメラで客の出入りも確認出来る。駐車場などで張っている可能性は否定出来ないが今はまだ大丈夫なはずだ。それでも背筋が冷たくなるのは

免れ得ないが。

有希を見る。当然ながらこんな心を晒け出して泣き喚くのを見るのは初めてだ。目尻を赤く腫らしてグスグスと鼻をすすりながら止まらない涙を露呈する少年は何とも可哀想であり、それが有希だからこそ俺はなんとかしてやりたくなる。

…だが。俺が助けて、何になるのだろう。

友達だから助けてやりたい？きつとそう思うのは当たり前だ。友達と想っているならばそいつと仲良くしているという自負が己にはある。それは頻度が多かれ少なかれ頭の中に刻まれた思い出を構成するピースであり、そのピースである友人本人を失うのはなかなかの痛手だろう。二度と会えなくなるのは尚のことだ。

しかし、そんな危ないヤツらを相手に孤軍奮闘するのは馬鹿げた話だとも思う。

例えば、友達だからといって連帯保証人になるのは大変なことなのだという話はよく聞く。その友人はもはや連帯保証人を友人だとは思っておらず、使うだけ使った金は返さずにそのままドロシ、残ったのは馬鹿な判断をして取立に脅される人間ただ一人…とかいうアレだ。

似たような、もの。有希の借金を背負うのはきつと俺には出来ない。一企業の社長といえど、その年収は7000万に届くか届かないかの瀬戸際といったところ。話しぶりからもはや返すことを諦めなければならぬほどの額なのだろう。

「…はは。まったくよお…」

そこまで考えて、頭の中で自分による批判と中傷を大量に展開し、思うのだ。

(有希を、助けたい)

頭をポリポリ掻きながらぼんやりと考える。それはどんな思いから来る言葉なのか。俺はそんな馬鹿なことをするほど熱い男じゃなか

つたし、今でも違つと思つて。

「…ああ、そうか」

はたと気づけば、理解して。

「…有希」

「ひつく…えぐ…」

小さくて、ふるぶると震える、寒そうな肩。男とは思えないくらい華奢で、可愛くて、儂くて。

「有希。一度しか言わねえからな。聞け」

それをがっしと掴む。逃げ場は作らない。作らせない。この小さな男の子にはきつと酷なことをしてしまうのも分かっている。けれども、不思議と嫌われることはないと思つていた。『今度』こそ、受け入れるのだからとも考えていた。

息を吸う。大きく。

息を吐く。小さく。

テレビやら小説やらで見るシーンをいざ自分がやるのかと思つと、もうどうしようもないくらい心臓が高鳴つた。こんな重い想いは人生初にして人生最後にしたい。無理か？いや、きつと大丈夫。コイツは照れ屋で無愛想だけど、分かりやすいくらい単純だから。

やっとなら全部、伝わつたから。

お返しを、しよう。

「…好きだよ、有希。お前のこと…愛してるから」

パートA - 3 (後書き)

まだまだ有希とシユンさんの話は続きますが、とりあえずそろそろちよっとだけえちい描写に挑戦してみます！

感想、評価、アドバイスなど、こっそりお待ちしております(*・・・*)

パートB - 1 (前書き)

パートB - 1、男の娘回です。

今回は全体的に違和感があります。部分的に引っかかりを覚える描写も多いと思います。

アンバランスな空間で読みにくいかもしれませんが、ぜひ御一考してみてくださいね！(*・・*)

良い夢を見た。

シートと彼の腕の中、温かくてもすれば二度寝も三度寝も余裕で出来てしまいそんな空間で。瞼を上げて、視線を注ぐ。

…相変わらずの、間抜けな顔だ。

ぼんやりとした脳内でぐるぐる回る思考を止め、胸いっぱい息を吸い込む。少し苦いような、甘いような。鼻先をつつく刺激はほとんど彼のもの。そこにぼくの痕跡なんか、何も残ってはいない。

逆にぼくのカラダにはたくさんの彼が刻まれていた。唇の吸いついた首、締めつけるほどに愛した秘孔、握られ擦られ蜜を吐き出した生殖器、裏切りと嘘を重ねた末の強い欲望。ぼくの身体はきつと多くが水で構成されていたのだろう。今はそれも変わってしまった気がする。

いや。きつと、気のせいなんかじゃ。

「……………はあ」

向かい合ったカラダはとても堅い。話によれば『あの日』から、何でも健康のために週末はジムに通っているらしい。駅前のロータリーの一角にある生徒がいるのかいないのか分からないエアロビクス教室に併設された小さなスポーツジムで、ランニングマシンにムスツとした彼が一生懸命取り組んでいる姿は可愛いに違いない。どれだけ鍛えられた身体をしても、シュンさんはそんな人間なんだ。ぼくはそれをイヤってほど知っている。

白い肌にとつと抱きつく。皮膚炎には縁が無いとか何とか言っていた、その触り心地が抜群で…気持ち悪くて、キモチイイ。すべすべしたカラダをぎゅーっとしてみても熟睡した彼は全く起きない。死んだように静かで、でも、とても温かかった。

ぼくは諦めてベッドから出るとまずは昨夜脱ぎ捨てたセパレート状のメイド服を着始めた。下着は雰囲気が出るようにと用意されたフリル付きの白。最高級品らしく、秘部や弱点を包む布地の柔らかさに気が弛まずにはいられなくなってしまふ。その上からスカートを履き、エプロン付属のウエイトレスの制服に似たそれを着る。ゴシックではないのだろう、色は水色、レースは眩い白でシンプルなデザイン。長いスカートは簡単にぼくの膝までを覆い隠すし、ぶかぶかの上着は袖の中から指が何本か覗くくらいに丈が合わず、大きい俗にいう乙女袖なのだろう。その小さな肌色の接触点で頑張る姿が好きだと彼は言っていた。

ピンク色のリボンをネックに結ぶ。鏡を見なくても結べるようになったのはいつからだっただろう。最もぼくには時間なんて関係の無い概念になってしまったから、心底どうでもいいかな。

「今日は、シンプルに…洋食にしよう」

何百何十何回目かの洋食。そういえばぼくは時々ま思っただけだけど、日本で食べれる料理が『和食』『洋食』『中華』って分類になっているのはとてつもなく失礼じゃないかな。例えば。起源を考えてみると、現在日本に浸透しているカレーは元々インドの薬膳料理だ。多種のスパイスを用いて完成されるパンチの利いた料理だけど、あんなに個性的なものが一般人の中で『洋食』に分類されるのはとてつもなく腑に落ちない。ルールに則ってなくてキモチワルイ。

…あ、日本で食べられてるルーを使ったカレーは正式の物とは断絶違ったつけ？それじゃあ別の分類に入れてもいいのかな？なら、カレーという名前もリネームしちゃおう。命名、『辛味入り汁掛け飯』。

うん、完璧だ。

そんなくだらないことを考えながら手元を鮮やかに動かす。

『洋食』という言葉に恥じないほどしっかり用意された、サラダとトースト、スクランブルエッグにハム。厚切りのパンに塗ったマーガリンはすぐにその生地溶けるように消えていく。キッチンから

ダイニングの茶色い木製テーブルに運ぶとついついお腹がきゅくと鳴った。

…おかしいなあ。 昨晩はお腹いっぱいになるくらい“出された”のに。

(…なんてね。 ふふっ)

最近のぼくはどうも変だ。 葦原有希を捨てて笹野ユキとなつてからの生活が原因だと思っけれど、どんな感じで変なのかと聞かれたら恥ずかしくて答えられない。 常人とは思考プロセスが違ってしまつたとか、一週間のほとんどをココで過ごすとか、彼と一緒にじゃないと眠れないとか　　ソレを“する”ことを、嫌がらなくなつたとか。

(…昔のぼくじゃ、絶対考えられない。 だって　　だって、昔は、怖くて…)

思い出す、夜の闇。

纏わりつくように重いその暗黒は月によって緩和され、ぼくの肉体を彼へと晒して。

耳元で囁かれた言葉を抗えないまま復唱し、もしくはその命令を従順に実行し。

よく出来た時には『ご褒美』を、拙い仕草であれば『お仕置き』を股間に施され。

ひとしきり喘いだ後は、甘い誘惑に負けてしまい、自ら脚を開いて。

そして結局。

動いて、愛し合つて。

初めの頃はとうだったんだろう。 ずいぶん酷いことを言ったり、もしくは受け入れても刺激に耐えられず背中を引っ掻いたりしていた気がする。 その葦原有希に近かつた笹野ユキは、日々の幸せな生活に埋もれて消えてしまったみたいだ。

「…寝坊助なんだから」

そつとベッドに近寄る。油断したシュンさんの寝顔に胸のどこかがキユンと疼き、頬に熱さを感じながら躊躇いがちに手を伸ばす。布団の上から身体を揺さぶると使い古したベッドがギシギシと鳴った。「シュンさん、朝だよ?」

「んー」

「今朝はパンと、サラダと、スクランブルエッグと、ハムと」

「んー」

「…ぼくも食べていいよ?」

「いただきますっ!!」

「はいオハヨウゴザイマスー」

ガバアツと起きて抱きついてきた彼から何歩か遠ざかる。空振りしたダイビング・ハグの勢いのまま床にぼてっと落下したシュンさんは、明らかに裏切られたという表情を浮かべてムクツと起き上がった。

「…ユキ」

「はい、シュンさん」

「…おはようのキス、お願いします」

「はい、よく出来ました。…んっ」

素直なシュンさんにはにかんでしまう唇を押し隠すように、ぼくは起き抜けの生暖かい唇にそれを押しつけるのだった。

美味しい朝食をとって、軽くシャワーを浴びて、歯磨きしながら髪を乾かされ、仕事用のスーツを着て、最後にネクタイを結んでもらう。平日の朝の彼は毎日飽きもせずそれを繰り返して、ぼくも文句一つ言わずに従う。小さな手でキュツと綺麗に結べたネクタイに満足そうだけれど、きつとその表情はネクタイの出来だけに反応した結果じゃないはず。

「ユキ、ありがとうな」

「んーん。ぼくもネクタイ結ぶの、好きだから。シュンさん、お仕

事頑張つてね」

「ああ、今日も嫁のために頑張る！」

「…本当にちゃんと頑張ってる？最近ぼくのことばかり考えてるんじゃないの？」

「そりゃ最近どころか『あの日』からずっとだぜ。愛するユキが家で何してるのかなーとか考えてたらもう仕事が進む進む！」

「…シユンさんの頭の中では、ぼくは何をしてるの？」

「あー…そうだな。シャワーを浴びたり、ベッドでもぞもぞしてたり、内緒で買った大人の玩具でイロイロ愉しんでたり？」

「してないからっ！ほら、早く行かないと遅刻するかもしれないでしょっ！」

「お、もしかして凶星か？」

「はいはいイッテラッシャイマセー」

適当に手を振ると「つれないなあ」と苦笑されてしまった。2人きり、トコトコと廊下を突っ切り『玄関横にある逆三角形の絵が描かれたボタン』を押す。そのまま靴を履いたシユンさんは優しい笑みを浮かべていた。ぼくが何を考えているのか知っているんだ。…意地悪なヒト。

「…あ、あのね、シユンさん」

「おっ」

「…早く帰ってきてね」

「何でだ？」

「……………だつて、寂しいんだもん」

「ははっ、分かってるよ」

そのままもう一度、唇を軽く重ねる。行ってきますのチューだ。この瞬間はいつになっても慣れない。柔らかくて、温かくて、甘酸っぱくて、いい匂いで、切なくて、悲しくて、寂しくて、気持ちよくて、満たされたくなくて。離れてしまえばもう二度と会えないんじゃないかとすら思えるような焦燥感がぼくの全身を焼き、抑えられないまま身体に抱きつく。

このままもう一回、ベッドに向かってしまいたい。シュンさんだつて絶対そう思ってるだろうし、一度くらいなら会社を休んだつていいと思うし、ぼくはいつでも準備オツケーだし、毎朝毎朝そんな経験に身を切るような思いをするのもいい加減報われていいと思う。なのにシュンさんは唇を離すと、また満足そうに笑つて、小さなぼくを抱きしめてうなじをそつと撫でる。特注メイド服の背中側は遊女の衣装のように肌を晒しているのだ。この堂々と露出している部分を愛撫するのがシュンさんの好物の一つだった。

…ピンポーン

「あ」

高いインターホンの音と共に自動でドアが横にスライドし、無人の個室が現れる。狭くてほの暗く、灰色の、息が詰まりそうな『エレベーターの内側』。シュンさんは最後に頭をそつと撫でるとゆつくりとその中へ踏み込み、ぼくを振り返つて。…やっぱり温かくて優しい笑みを投げかけていた。

「…行つてらっしゃい、シュンさん！」

「ああ、行つてくる。いい子にしてるよ」

ぼくはそれに応えるべく、満面の笑みを浮かべた。

シュンさんの言うとおりだ。今日もいい子になって、お掃除とか頑張つて、御褒美をもらわなくちゃ。

スライド式のドアが閉まると共に、玄関の上から鉄の格子が下りてくる。ドアにピッタリ寄り添うように佇む格子は、床に掘られた位置固定用の穴に先端が鍵状の鉄棒を下ろし、その場で60度ほど回転した。重く苦しい『がしゃり』という音が、ぼくの柔らかかな耳にこだました。

お洗濯を終えて、お昼ご飯を食べて、お掃除を終えて。午後2時、ベランダに設置された東京を一望出来るミニテーブルに紅茶とクッキーを置いて、ぼくは音楽を聞きながらお気に入りの本を読んでいた。外に置いておいても汚れない特別製のリクライニングチェアはふかふかしていて、おしりと背中ではふんばふんと跳ねてみる。太陽が輝く青空の向こうには何羽か鳥が飛んでいた。ふいにそれが手の中に収まりそうな気がして、危険回避用の鉄柵の間隙から腕を伸ばす。冷たい風がぴゅうと吹き、ぼくは不思議と恥ずかしくなつて手をこつそり引つ込めた。

口ずさむのは、耳元に流れているバラード調の歌。電子の歌姫とやらが歌っているそれはメロディーがとても綺麗で、最近の技術はすごいなあと素直に感心する。何度も何度も繰り返し返して聞けば、その度に歌詞が身体に染み込むような重さを持って鼓膜を震わせた。人間に近くて遠いデータの群れの内側に隠された想いが聞こえるような気がして、ワンリピートを止められないまま数日が経つ。ぼくはそれをすっかり記憶し歌えるようになっていた。

一方、本のタイトルは『罪』だ。これはシユンさんがよく集めているミステリー小説の中の一冊であり、ぼくがココに来て初めて読んだ本でもある。少し厚くて黄色くくすんだ紙の上にはありとあらゆる文字が踊っていて、『彼女は罪を受け入れた。』『瞬間、彼が柔らかな笑みを浮かべる。』『「ジェイル、あなたの中は温かいね。いつまでもこの中に居たいよ……。」』『目に映った官能シーンについて赤くなり、結局またこのページで本を閉じてしまった。

最後に残ったクッキーを口の中を含む。渴いたサクサクという音とチョコレートの甘さが舌の上で駆け回り、そのハーモニーに酔いしれながらひとりで紅茶を飲む。ちよつと前に入れたレモンティーだ。冷めても美味しくほつとする。

ピッ ピッ ピッ

オーディオプレイヤーのボタンをいじって旋律の輪廻を止めた。イヤホンの外側には都会の喧騒を彼方へ押しやった空気が広がっている。心地良い世界だけど、いつまでもここにいると風邪をひいちゃう。そうなればシュンさんは気が狂ったかのように連日介護をしてくれるはずだ。想像して、ちょっとだけいいなと思ってしまった。部屋に入りつつスリッパを履き、後ろ手に硝子戸を閉める。

陽の光を浴びたカラダはふらふらとベッドに向かった。倒れ込んでぼふつと包まれながら、その下に隠された箱を取り出す。黒くツヤツヤと輝くその中に収まっていたピンク色の『電池式機械』や『拘束用具』。使い慣れたそれらを手に持ち、彼を思い浮かべながら電源を入れる。

……………カチッ

バレてるのかな、なんて思った。

パートB - 2 (前書き)

パートB - 2です。

ユキの日常が2 / 3、そして急転です。というか日常風景って書くの難しいですね…。

急転シーンには性的描写を含みます。もちろん直接的に書くことは避けていますが、雰囲気もイヤだという方には申し訳なく思っています。けど…大事なシーンなので削るわけにもいなくてw

シユンさんが帰ってくるのは、大体いつも夜8時過ぎだ。カラオケ店の社長さんだったらずっと仕事場に居てもおかしくない印象があるけれど、実際には深夜の部は信頼出来る店長代理さんに任せているみたい。たまに夜中、トラブルが起きた時に携帯で連絡をとっているのを見たことがあった。

帰ってきて8割方はシャワーを浴びるのでついでお風呂に入ってもらおうと思う。沸かしている間、ぼくはキッチンに立って料理を作る。ココでのご飯の担当はぼくだ。日夜メニユーと格闘して主婦みたいだなあとと思う度、シユンさんと式を挙げる姿を妄想してはパタパタと手で顔を扇ぐ。まだ、まだ早い。ぼく達は付き合って半年も経っていないんだ。いくら好き合っているからって、時期焦燥。

もつと愛を育まなくちゃ。

それに、日本では男同士だと挙式が出来ないって聞く。幸いにもぼくとシユンさんはそれなりに英語がデキるみたいだし…ぼくはアメリカのどこかでウェディングドレスを着れたらいいな、なんて思う。シユンさんなら1000%（1000%の10倍！つまり“確実”だ！）似合うと言ってくれるだろう。間違いない。

今日は朝が洋食だったから、夜は和食にしよう決めていた。得意な鯖の味噌煮だ。濃いめの味付で煮込んだ鯖と千切りした瑞々しい生姜。そこに上品に味噌を垂らす。濃厚で食欲をそそるあの香り。そこに三つ葉をそつと添えて、炊きたての白いご飯と温かいお吸い物と一緒に食べる。絶対に美味しいと自信を持って言えるレパートリーの一つだから、今回は歌を歌いながら楽しく作れた。

『がしやり』。

“回転音”。金属がたてた騒音に思わず反応し、盛り付けるのは後にしてぼくは玄関へと走った。裾をひらひらさせながらスリッパでバタバタ駆けていく姿はちよつとみつともないかもしれないなかった。格子の退いたドアがスライドし、ちよつとお疲れモードの20歳男性が現れる。スーツがせつかくキマっていてカツコイイと思つたのに、今日はズボンが水か何かで汚れていた。

「　　ただいま、ユキ」

「おかえりなさい、シユンさん！」

すぐに靴を脱いだ彼はビジネスバッグを持ったまま、抱きついたらぼくを受けとめてくれた。苦い珈琲と臭い煙草のニオイで咳き込んでしまうと、シユンさんは上着を脱いでワイシャツで抱きしめてくれる。厚いスーツの内側にあつたからだろう、彼独特の香りにぼくは包まれた。大きな腕で引き寄せて、大きな手でうなじを撫でて、大きな口でため息を漏らす。

「ああ…柔らかい、小さい、温かい、可愛い。本物のユキだ、幻覚じゃないんだ…」

「禁断症状出たの!？」

「…俺は嘘ついたことないんだぜ！」

「今そう言つと大変な解釈になるよ!？」

やけに自信満々な顔には不敵な笑みが浮かんでいる。からかったんでしょ、と聞いてみると「俺は真面目だ」と言っただけだった。多分、嘘だと思つた。

…でも、すつごく嬉しかった。

「ほーひへははー」

「食べてから喋る!」

「っ…はあ。そーいえばさー」

シユンさんはすでに鯖を2人分食していた。ご飯もお茶碗に山盛りしたのを3回もおかわりしている。ガツガツ食べて美味しそうに微笑むのを見てるだけで満足するぼくは、普通に1人分だけ頂いてゆつくり煎茶を啜っていた。

「来月の頭の議会での議題がまた『集客力向上について』なんだけどさ、どうしたらいいと思う?」

シユンさんは真っ直ぐな瞳で(箸の動きは止めずに)ぼくを見る。口いっぱい食べ物を入れて咀嚼する姿はまるでゴツい顔のハムスターのようだ。ほっぺたが頬袋みたいに膨らんでいる。苦笑すると「あ、笑ったな」と苦虫を噛み潰したような表情に一変した。面白くてまた笑ってしまう。

しかし、集客力向上…この議題は今まで受けた相談の中で最も多い確か4回目だ。クーポン配りや料金プランの変革だけではまだまだお客さんの心を掴むには足りないらしい。まあ、その通りだけど。

(んー…立地はどうにもならないし、他店を風評被害に遭わすのはマズいよね…メニューも色々頑張ってるみたいだし、あとは機種導入、かな)

確かシユンさんのお店に設置されてる機種の比率は、業界No.1マシンのSAM(Song And Music)の略。パクリじゃないって言った(の最新機種が全国で31%。続く第3世代型を合わせると92%で、第2世代型以前は未使用。全国でSAMを配置していないシユンさんのお店が8%存在する、ということだ。

次に人気が高いのは電子の歌姫の曲がたくさん入っているFOYSOND(提供会社名はマル・フォーイフォイとかいう外国企業らしい。2回目だけどパクリじゃないって言ったからね!)。FOYの最新機種は29%、第2世代型を含めても48%しかないみたいだ。ぼくは音質重視だからSAMでしか歌わないけれど『歌いたい曲があるかないか』という基準はかなり重要だと思う。その点から見れば、この穴は当然埋めるべきだろう。

ちなみにその次に人気のMUGA(もう分かるよね。詳細は省略す

るね)やら何やらは元々設置数が少ない代わりに利用客も少ないらしい。それでもその機種を愛用するお客さんだってもちろん居るのだ。だからシユンさんとしては機種を減らすのは考えたくないと言っていた。

「…分かった!」

「おお!来たか!」

ぼくはシユンさんにFOYの機種を、特に最新機種をなるべく都内に導入するかわりに、SAMの第3世代型をある程度売るか回すかといった策を提案した。シユンさんも薄々感づいていたらしく費用がどうとか手間がどうとか言っていたけど、ぼくは譲らない。

「だってね。SAMの最新機種は去年から販売されてて、FOYは2年前の夏。MUGAはちょっと分からないけど…運用して利用者の声を集める期間と開発にかかる年数を考えたら、少なくともあと5年は安泰だと思う。それにシユンさんのお店は都心にもそこそこあるけれど、数で見たら東京都外の方が多いでしょ?都外ではそれこそ機種の違いなんて大したものじゃない。都内の選択性を増した方がお客さんは入るよ…確実に」

「……………ん?話が読めないな…」

「つまり。首都圏外の同道府県内にある店の中で利用客に応じて機種を統一するんだ。特にライバル店の少ない地域では徹底的にね。

あ…都道府県別の客層資料と他店舗数のリストを見せてほしいんだけど…」

計算としては、簡単な話。都内では『…の機種がないから』という理由で店を離れる客を掴み、都外ではFOYの最新機種によるネット動画サービス(ネット上で自分の歌った動画を公開出来るみただ)を使いたがる生産年齢層を掴む。そしてSAMの第3世代型を回す位置は…カラオケ利用者に老年層の多い場所だ。老年層の要求は分かりやすい。要は『休憩所』か『歌えれば良い』なのだ。

シユンさんは言われるままにそれらを鞆から引っぱり出してきた。良質の用紙に印刷されたインクの羅列は普段読んでいるものとは全

く違い、無数にも思える組み合わせを晒す数字と社会で見知った名前ばかりだ。さらさらと流れるようにそれを辿りつつぼくの頭の中はスキームをまとめていく。

「…とりあえず、都内店はSAMの第3世代型とFOYの最新機種を半数交換して。それから北海道、愛知県、福岡県はFOYを全て最新機種で揃える。交換されたSAM第3世代型はなるべく他のFOY第2世代型に交換してもらって、それを……」

「ちよいちよいちよい！分かった、今からメモとるから！待て、頼むから待て！」

急ぎすぎたみたいだった。

そして、夜11時。

ぼくとシユンさんの時間が始まる。

「ユキ」

「…はい」

「おいで」

夜の闇とカーテンから漏れた月光だけが身を包む。お日様の匂い。ベッドがわずかに残したそれも、シユンさんの不思議な香りの中へ、溶けて、消えていく。熱はない。あるのは多少の肌寒さ。ぼくのカラダは、だから、凍えてしまっていて。

服は着ていない。メイド服は脱ぎ捨てられ、下着姿。それから、首には犬を躡るための輪。リードの先はもちろんあの大きな手の中だ。ぼくはベッドの上で伸ばされたその手をとった。カクン、となるくらい引つ張られ、シユンさんの腕の中へ。ぎゅっと抱きしめてもらうと、やっぱり温かい。胸の奥がトクントクンと高鳴り、自分でも表情が緩むのが分かる。

「 シュンさん」

甘え囁く懇願の声。

成長しない、女の子のような高い声。

「 コキ」

返すは熱く強い声。

その真面目で素敵な表情に、ぼくの自然な笑顔が露呈した。

ぼくはそのままシュンさんに肉体を委ねる。背徳的な高揚感に神経を引き裂かれそんな快感を覚え、ため息と喘ぎが混ざった無秩序な呼気に興奮はさらに増して。カラダの一部が熱を帯びて膨張し、早くシたくてたまらない。ぼくが身じろぐと少しだけ、毎日使っている薔薇の香りの石鹸がその効果を現した。

そっと、触れて。

カラダの隅々にまで響きわたりそうな、接触による熱。

…動く。

ゆっくり、ゆっくり。

ゴツゴツしたその手が愛しくて、ぼくはうつ伏せのまま何度も小さく鳴いた。『嬉しい』『もっと欲しい』と呟く心の代わりに口から蕩けそうな嬌声ばかりが漏れた。

指先はそのままぼくの背筋を撫で、ぼくの左腰を撫で、ぼくの………

「 んっ あん」

はしたない、色にまみれた音。もぞもぞと動くのに合わせてその手がぼくの秘部を包む。同時に、彼の目の前で乱れていく。暗く黒い瞳孔の内側には恍惚とし淫らな微笑みを浮かべるぼく自身が映っている気がした。

「 シュン、さん…ふあっ…」

『くちゅ』、と。

何処かを侵していく肉の感覚。

血液は沸騰し、体中がいつものように危険信号シグナルを奏で始める。

異物、異物、異物。

それは孔には入ってはいけませんが、
けれど今、その異物をぼくはすんなり受け入れられるほどに
調教されていて。だから、何の躊躇もない。
だって、全然痛くない。
むしろ、この感覚は。

(… キモチイイ…)

その感想はきつと間違いなんだろう。でもぼくはこれを受け入れざるを得ない。

… 何故なら、恋をした自分のため。

そして “自分” を守ろうとする、彼のため。

逃げてはいけない。逃げられない。

歯車は、ぼくがこの人に抱かれた瞬間から狂っている。だけど、まやかしの幸せって言われてもぼくは構わない。彼は、シユンさんは、ぼくのことを今頃… どう思ってるんだろう。眼前にいるはずなのに、それは霧に隠された世界のように朦朧として見つからない。

「 あっ う ふあっ ああっ 」

侵攻と離脱の繰り返し。速度は上昇、感度はさらに上昇。ぼくの遙か後ろの何かの水音をたてる。やがて異物はその本数を増やし、ぼくを激しく責めたて、ぼくはぼくでいられなくなっていく。

昇華されて辿り着く世界はいつだって無限大だった。歌では到底見つけられない、生物的な人間としての道を踏み外した先にある快樂。“そういう用途” に使わなければならない部分も賤てやれば“そういう用途” に変わっていくのだ。それは同じく本来であれば得られない愉悅の享受をも意味する。つまり、ぼくは今、強固な決意や正義の心といった敗れないはずのものを簡単に溶かし屈服させ魅了してしまうような そんな悦びに溢れていて。

「 あ、あっ、しゅんさ、ふあ、あっあっ 」

微塵も止まらなくなっていく、その運動。まるで彼ではなくなるの

を現すかのような激しさ。ぼくの内側が絶え間なく悲鳴をあげ、その美感に意識が呑み込まれていきそうになる。どうしようもないフラッシュの嵐が脳内に閃くに連れ、満たされていくカラダがビクビクと痙攣し、シグナルは遠くへ消えていく。

視線を上げて、突如無理矢理塞がれる唇。息が出来なくて苦しくて、それでもイヤとは言えない。内側で絡む舌の勢いに耳の内側で卑猥な旋律が響いているような錯覚まで起こし、その瞳を覗く。

虚ろな、漆黒の眼差し。

それが　　輝く。

ぼくの唇を奪った彼はそのまま離れ、少し乱暴な愛撫を施しながら笑った。

「よお　　まだオマエか、ユキ」

「…はい、笹野俊祐さん…」

彼はシユンさんじゃない。

笹野俊祐という闇なんだ。

パートB - 3 (前書き)

パートB - 3、折り返し地点です。

展開を忘れそうになったので大急ぎで書いてしまいましたw

閲覧者の皆様、いつもありがとうございます。ここでユキの現在は終わります。そして2人は反対を語ります。予測がついている方も何となく読んでいらっしやる方も、どうぞお付き合ってくださいませようお願いします。

この世界は、とてもアンバランスに出来ている。それは魔法が使えるとか勇者がいるとかいうファンタジーな崩壊じゃないし、かといって未来へ時間旅行したり機械が人間を殺す文明があるわけでもない。だが、その非日常性だけは受け継がれた。“似たようなもの”。そしてオレが、その“証拠”なんだよ。

午前11時。洗濯物を干したぼくは、相変わらずベランダにある柔らかな椅子に腰掛けたまま記憶の道筋をたどっていた。頭の奥底まで潜る意識とともに、あれが彼の最初の言葉だったことを思い出す。あの初めての夜には『時すでに遅し』だったのだが、あれはきつと彼なりの警鐘じゃなかったのか。ほんの少しだけそう思いながら、渴いたクツキーをつまむ。

今日は少し空模様が悪い。青空が雲の隙間から様子を窺っては隠れてしまい、太陽の光はいつもより暗く辺りを照らす。天を埋め尽くさんばかりの白雲はわたあめなんてイメージを振り払うかのように重くどんよりした気を醸し出している。そんな日でも洗濯物は外に出して渴かさなくてはいけない。部屋に乾燥機は入れられないから。昨夜の密事を思い出す。笹野俊祐はぼくのことをいつものようにいじめ、いつものように縛り、いつものように責め、いつものように挿れ、いつものように 果てただけだった。エスカレートしていくそのプレイにぼくのカラダは何度も悲鳴をあげ、ぼくのココロもぼろぼろになった。

カラダには彼の爪痕がたくさん刻まれている。それは痛くもあり、気持ちよくもあって 相変わらず首筋にキスを浴びせたり、ぼ

くの生殖器を何度も擦ったり。それからひりひりと痛む叩かれたおしりや時折電撃を流されたかのように動きを止める腕。最近は加減を覚えたらしく、抓られたり切られたりした傷はほとんどない。シユンさんの気に入っている綺麗なカラダはある意味大事にされていた。

しかも、そこまでされてもぼくは最後にシユンさんにもう一度シてもらうだけで全てを許してしまう。

甘いとても何でも言えばいい。

ぼくはそれで満足しているんだから。

(…ううん。…満足なんて、してない…)

即否定した事実にはどく落ち込む。

ぼくはアレさえ受け入れて彼を愛することを決めたというのに。

まだ、まだ望んでしまうのだ。

風がピュンツと吹いた。強く打ちつけるようなそれに思わず目を瞑る。耳の中に轟音が届くと同時に服がぱたとはためき、次いでベランダに『ポテツ』と何かが。

「……………あ」

それは、鳥。

(昨日見たあの群の鳥じゃ…ないよね?)

冷たい灰色のコンクリートにただ倒れ込むその姿。なんだか小説やゲームで見る、砂漠で行き倒れた旅人のような格好だ。白くふわふわとした羽根に包まれしんと静まり返って、呼吸をしているのかどうかも分からない。近づいてみても逃げることはなく自分で動けなくなっただのかと心配になる。

「…大丈夫かな…?」

瞳らしき部位はペタンと閉じられていた。嘴は黒、少し鋭いけど見た目は穏やかそうだ。部屋から割り箸とティッシュをいくつか取ってきて、その先端に巻きつけてから優しく鳥を挟む。小さな体は震えることもない。

だから。

「っ……！」

ひっくり返して、絶望した。

半身が何かの液でべっとり濡れており、肉体の凹凸が削られたかのようになくなっている。慌てて離れて辺りを見ると、同じ液体のついた鉄柵が視界に入った。

「……………、ごめん」

誰にもなく謝った。言葉はいつの間にかコンクリートと同じ色に変わった空へ上っていく。刹那的に、誰にも聞かれてなくて良かった、なんて思ってしまった。

無駄に買っただけで何も育ててなかったらしい鉢植えに土がたまっていたので、ぼくは鳥をそこに埋めた。供養代わりにと米粒と水を用意し、土の表面に2つ穴を掘ってそこにに入れてみる。米はそのまま残った。水はすぐに飲み干されてしまった。

ベランダから戻ったぼくは、久しぶりに部屋を見回した。相も変わらず木の温かみが優しいフローリングに真っ白で美しい壁紙がよくマッチしている。ダイニングには大きくてガツシリしたテーブル。

ここでぼく達はご飯を食べながら会話をしたり、ベランダへの入り口となる窓の横に据えたテレビを見る。さらにその隣には使われていない電話機といくつもの携帯の充電器が散乱した黒いミニテーブルがあり、そこにボールペンがぼつんと落とされていた。

その部屋に隣接するスライドドア。その先にはぼくとシユンさんが一緒に寝るためのベッドがある。触るとまふまふつとマシユマロに包まれるかのような感覚と共にギシギシと軋む音。昨日の遊びの影響か、どこかしつとりと陰気を帯びているシーツ。頭の位置の真上にも窓は存在し、都内の様子が薄いレースカーテン越しに一望出来る。対面には大きなクローゼットがあり、中にはぼくとシユンさんの服が入っている。黒いジャケットや灰色のハイネック、群青色のジーンズに暗い迷彩色の靴下、水色のブラジャーから仕専用のスー

ツに女物のワンピースと乱雑に散らかっている。かけられた服の下には大きな箱がいくつか並んでいるが、ガムテープでべたべたと開け口を固定されていて開かない。わざわざ開けようとも思わない。今度はキッチンに移動してみる。カウンターの向こうにダイニングが見えるこの場所で、もうずっとぼくはご飯を作っている。コンロはもちろん最新式のIHとかなんとかいう、火が直接は出ないタイプだ。調理するためのスペースを挟んで流しがあり、今朝のご飯の洗い物のあとに少し頑張つて磨いたのでシンクはピカピカに輝いている。振り返るとぼくの背丈より少し大きいぐらいの、小さな冷蔵庫。コンロ側へ向かうに連れてその壁際には電子レンジと食器棚が並んでいる。調理場の上方にある換気扇をつけっぱなしにしていたので消した。

廊下へ出ると右手側にトイレへのドアが、さらに少し奥に洗面所へのドアが佇んでいる左手側には何の趣味か、現代アート風の絵画が4つかかっていた。シュンさんがお仕事のお付き合いで頂いたらしく、こちらから玄関へ向かうに連れて『四つのメイク - 作者：たかろ』 『読書 - 作者：スレサ』 『犯罪“縦”行 - 作者：Kenire』 『伝言（現実） - 作者：てこる』 といったタイトルがほとんど見えないくらい薄くつけられている。おせじにも上手いとは言えない絵だけれどこれは絶対捨てられない。シュンさんがまだ気づいてないからこそ忘れないように、ぼくは毎日これを見る。

洗面所には脱衣場と風呂場が並んでいる。ドア一枚で隔てられた風呂場は今ひっそりしていて、中にいると何者かに襲われそうな気持ちになってしまった。暗くじつとりした雰囲気を通り切ろうと扉を閉め、洗面所が普通の明るさであることに心底安堵を覚えた。そして最後に、玄関を見た。

沈黙する格子のすぐ奥で静かに扉は閉まっている。空気は冷たい。ドアの隙間からはエレベーターが動くごんごんという音が漏れていた。格子には傷がついていてまるで猫が爪研ぎにでも使用してたんじゃないかとさえ思われる。近づいてみて初めて格子が鉄製で

はないことに気がついた。鉄よりも堅い何かなんだろう。改めて思う。この歪な空間の正体は。

「 …… 牢獄」

牢獄と断定するのは案外簡単な話だ。何故なら。

ぼくは『あの日』からここに居る。

あの雨の日。

“ぼくは荷物を持っていなかった”。

だからこの空間に“ぼくの物は一つもない”。あの音楽機器も、メイド服も、“大人の玩具”も“ブラジャー”も…全て、ぼくの物ではなかった。だけどそこはまだ、シュンさんがぼくのために用意したと言えば済むかもしれない。

では、“散乱した多くの携帯の充電器”はどう説明するのだろうか。

普通の人間は、携帯なんて1つ持っていれば十分だ。仕事用とプライベート用として分けたって2つ、それ以上は必要ないしお金もかかる。充電器の数は6。その先端に繋がった機械は今、1つも存在しない。隠していれば別だが、ぼくの知るかぎりシュンさんが持っている携帯はたった1台だ。

この推測が外れだとは思えない。最近の携帯にはGPS機能が自動搭載されていて消息をたどるために逆探知が出来るという。そんなものを放置しておいたらきつと今頃この部屋は存在していないだろう。

だからこそ、その推測からは文字通り恐ろしいほどの情報が溢れ出す。

それが指すところは要するに、他に人が居たということ。その中に

女性が含まれていたことは分かる。人数は“5人”。シユンさんの充電器を除いた残りの機械の数だ。

格子についた傷は何だろう。答えは単純、“逃げようとした痕跡”だ。

決して解けない封鎖を破ろうと“5人”は戦ったのだろう。ある者は刃物片手に、ある者は椅子を抱えて。どれだけあの格子を破壊しようとしても無駄だと分かるまで、何度も何度も、何かに怯えながら。やがてそれを諦めた“5人”はきつと隙を伺いながらシユンさんに相対してしまっただ。それが裏目に出たから、あのメッセーヂを残して消えただと思う。

現代アート四作のタイトル。あれは苦心の末何とか“5人”のうち誰かが刻んだものだろう。額縁に隠れるように残った傷のごとき不格好さがその文字から伺える。

タイトルは『四つのメイク』『読書』『犯罪“縦”行』『伝言』『現実』。作者は『たかる』『スレサ』『Kenire』『てこる』。ミステリー小説では定番の暗号メッセージだと思う。ぼくは掃除中に偶然これを見つけてから何日か考えていたが、ある日急にピンときた瞬間があった。

ぼくの頭の中では、これは『四つのメイク』を『“縦”』に『読書』することで『伝言』が得られるのではないかという結論に至っている。『四つのメイク』とはすなわち作を、または作者を示しているのだろう。それを縦に並べてみる。

たかる

スレサ

Kenire

てこる

これだけではまだ分からないかもしれない。Kenireなんかケニアと読むのかケニヤと読むのかその他の読み方があるのかと迷い

は尽きない。

だが、全てを平仮名に統一してみよう。この際読み方は無視、ローマ字としてKenireを見る。そうすれば。

たかろ

すれさ

けにれ

てこる

つまり

“逃げられない”と。

クローゼットの中にあるプラスチック製の箱の正体も予測がついている。多分あの中には、大量の消臭剤が、そしてビニール袋に包まれた腐りかけた肉の塊があるのではないだろうか。

「…っ…、…っええ…」

突然流しに嘔吐し、荒い息をつきながら思考を重ねる。シグナルはとっくに消えている。まるで脳が現実を忘れ去ろうとするように、シユンさんの優しい顔を思い出す。

ぼくは…おかしくなってしまうんだ。

絞り出した眩きは空間に溶けて消える。冷蔵庫から2Lペットボトル入りの水を取り出してコップに注いだ。一気に飲み下すと喉が凍えたような感じがした。

カラダが寒くて仕方がない。怖くて暗くて悲しくて、自分が同じ末路をたどってしまいそうな予感がしてならない。だけど、その予感に惑わされ敵対すれば確実にああなる。そこを見誤ってはいけない。ぼくはシユンさんを愛している。それは紛れもない事実だ。シユンさんに愛されるためなら何だって出来るし、シユンさんのことなら大体分かる。

彼女達はどうかだったんだろう。シユンさんの愛を拒んでしまったんだろうか。ぼくにはそうとしか思えない。笹野俊祐だって玩具を調達するには労力を必要とする。簡単には殺さないはず。二重人格は心の負担を軽くする代わりに体に負担をかける。特に性格が元の力ラダの生活に適していなければ尚更だ。

「…知ってる。どうすればいいかなんて」

分かっていた。ぼくが努めなければならぬ役割は、シユンさんを受け入れること。シユンさんに、無償の愛を捧げること。

シユンさんは言っていた。『同世代が信じられない』と。それは本人の気づかないうちに大きな傷となっていたのだろう。

全ては憶測でしかない。彼は真実を語らないし、シユンさんには語れない。ならばぼくはその分をずっと背負っていかうと思う。それが“ぼくが嘘をついた罪”の償い。

牢獄の中から、空を見上げてみる。

美しい陽光が雲の隙間から覗いていた。

パートX-1

ああ、まただ。

また、また壊してしまった。

オレは玩具で遊ぶのが下手だ。

新しい玩具を貰うと嬉しくて。

ついつい、振り回してしまう。

玩具がどんなに傷ついているのかも分からないまま。

オレは、何度か壊して、泣いた。

今回ので5回目だった。

人形みたいに綺麗だった。

その白い肌も鮮やかな唇も。

金色に輝く髪も透き通った碧眼も。

全部全部、愛しかった。

愛しくて温かくて、大切にしようとした。

だけど、その玩具は。

面白かった。

面白かった。少し触るだけでビクビク震えてただ言葉をかけるだけで顔を青くさせて狂ったように絶頂し叫んでいた。爪をたててみれば命乞いをし思いきり殴れば黙って涙を流す。縛って挿れれば抵抗出来ないまま恐怖だけを前面に押し出して甘く責めれば喘ぎながら思考を忘れて乱れてカッターで切れば再び泣き叫んだ。流れた血飛沫も唾液も尿も美しく完成されていたくせにその心だけは弱くて何度も何度も殺さないでなんて言っていた。面白かった。面白かった。面白くて楽しくて笑って叫んで責めて潰して切って叩いて挿れて壊した。

壊して、気づいた。

また、壊してしまった。

でも、それはオレだけのせいじゃない。

玩具がオレを拒絶した。

オレは主なのに。

玩具がオレを否定した。

オレは愛したのに。

玩具がオレを…。

だから、カッとなった。

あれからもう何ヶ月経ったか分からない。

オレが目覚めた時、新しい玩具があった。

玩具は可愛かった。綺麗じゃなくて、とても愛らしかった。オレは一目で恋に落ちた。

玩具は最初、戸惑っていた。それだけが許せなかった。またオレを拒絶するのか、そう思っていた。だけど、オレはすぐに知った。オレは生まれて初めて、ゴメン、なんて思った。

玩具は、オレと同じの、男だった。

それでも可愛かった。ただただ、可愛かった。愛されて当然と言えるくらい、愛らしくて、でもどこかセクシーで。

だからオレは、初めてブレーキをかけた。

難しかった。戸惑っていた玩具を、壊さないようにするのが。一生懸命考えて、一生懸命愛して、一生懸命丁寧に遊んだ。玩具は最初泣いていたけど、オレがとっておきの薬を使ってあげた。そしたら、笑ってくれた。もっともっと可愛くなった。オレに忠誠を誓って、気持ちよさそうだった。

次の日も、次の日も、玩具はオレを受け入れてくれた。

玩具は強かった。今までののと違って、とても強かった。オレが抑えきれなくなっと思って思い切り傷つけた時も、泣かずにただオレを受け入れてくれた。

玩具は時々、甘えてくれた。初めてだった。可愛いペットを飼ったらこんな気分になるんだろうなと思いつながら、オレはそのおねだりに応えてやった。玩具はもっとオレを愛してくれた。

オレは玩具を、ユキと名付けた。

ユキは最近、悲しそうな顔をする。

オレが何をしたか知ったんだ。

オレは怖かった。

ユキが、他の玩具みたいになってしまっくんじゃないか。

オレは、それだけは避けたかった。

でも、抵抗したら。壊さなくちゃ。

…ユキは、変わらなかった。

パートX-1 (後書き)

幕間。

彼は何故生まれたのか。

それもいずれ2人の唇が語るでしょう。

パートC-1 (前書き)

パートC-1です。

有希の過去をそつと綴っていきます。

馴れ初め部分ですのでパートAと被る部分ばかりですが有希側の描写ですので別気分が楽しめるといいなあ…orz

ちょっとリアルが忙しいので更新頻度が下がるかもしれません…)

…;
(;)

パートC-1

少し、前の話だけけれど。

ぼくは高校を中退し、大好きなカラオケに打ち込むようになっていた。

カラオケ店は地元でそこその数が揃っていて、特にお気に入りがあったわけでもない。初春の肌寒い中、スクールバッグに学ランを詰め込んで代わりに私服を着たぼくは、家から自転車で20分ほどかかる最も遠い『シナップス』を選んだ。ドリンクを頼まなくてもいいということと携帯での割引を使えばフリータイムを用いても500円で済むという安さ、他にはあまり他人に見られたくないという安易なプライドから生じた結果だった。

その頃は3月だというのに本当に寒くて、自転車で駆けていくのも辛かった。北風がびゅうびゅうとぼくの顔を殴りつけ震えるほどに寒い跡を残して去っていく。朝8時30分から全力で自転車を漕いでいても汗がほんのちよっぴり滲むくらい、他はもう満身創痍のガクブル状態だ。シナップスに着くとまずくしゃみをしていた気さえする。

そしてぼくは何の躊躇いもなく従業員専用の自転車置き場に駐輪していた。今にして思えば何と失礼で馬鹿でぶっ飛んだ行動をしていたのだろうなんて多少反省もしているのだけど、当時のぼくはそんなのお構いなしって感じだった。よほど考えが足りなかったんだろうと思う。

当然店は開いておらず、玄関口はまるでファンタジーやらRPGやらに出てくる妖しい魔法で封印されてしまった神殿入り口のごとく暗く沈黙していた。ぼくはそこを横目で見ながら店の裏手にまわり、従業員専用入り口にてじつと待つ。今にして思えば何と失礼で馬鹿

で(省略するね)だけど、その日からは何だかイケそうな気がしていたのも事実だ。事実無根の自信だけだ。

使い古して擦り切れたような傷が増えてきたバッグの中には、学ランの他にボーカル時代から使っていた楽典やお金がたくさん入ったお財布、緊急用のカロリーメイトと500mlのペットボトル入りの水に携帯と録音用レコーダーが入っていた。特にこのレコーダーはお気に入り、24000円もかかった代わりに性能は最高の一言に尽きる。カラオケ内での音量にも適応して的確にボーカルの声を拾ってくれるし、簡易的ではあるけどその場でエフェクトもかけられるスグレものだった。もちろんカラオケの機種には録音がてら動画を撮れるものもあって、公的なグランプリなどへの応募にはそちらを使う。レコーダーは家に帰る時や就寝前にその日の自分の歌声を聞いて反省点を見つげるための道具だった。

(…ドキドキする)

ぼくは冷たい空気に晒されながら、ふとそう思った。当てた手のひらからは胸の鼓動がトクントクンと鳴っているのが伝わる。少し速くて、でも小さくて。それは初めての『悪いこと』だったからだろうか？

ぼくは幼い頃からずっと素直だと言われて育ってきた。お父さんにもお母さんにもその方が良いと言われ、ぼくもそっちの方が良かったから。正直者で従順な子供だった。

そんな子供時代のまま中学へ入り、そこで出会った不良と呼ばれる存在に心底嫌気がさしたものだ。規律を乱し自由奔放に振る舞い、そのくせ所属という権利だけは求めて自分の都合の良いように全てを解釈する。そんな人間がぼくのことを女の子と勘違いして体着姿のぼくを組み伏せようとしたりした時、本当に『クズだ』と思ってしまった。結局友達が見つけてくれて喧嘩になったことで脱がされることなく済んだけども…あれ以来ぼくは、悪いことをする人間なんて馬鹿でクズでどうしようもないヤツらなんだと自己完結していた。

だがその思考も、高校での経験を通しすっかり変わってしまった。相変わらず可愛くなるばかりのぼくの顔に何を勘違いしたのかクラスメイト全員がぼくにお付き合いを申し出てきたのだ。あまりのことで一時期男性恐怖症になりかけたものだけど、私立高だったぼくは親に内緒で退学届けを出し何とか事なきを得た。仲の良かった先生に特別にしてもらい親に連絡はしていないまま、ぼくは朝学ランを着て家を出てはすぐその路地で着替え、私服でファーストフード店やゲームセンターに入り浸りこの4ヶ月でバイトを死ぬほど続けた。

時給800円×7時間+時給900円×7時間を週2〜3回、それを4ヶ月。その資金は今、ぼくの部屋にある勉強机の裏側にしっかりと隠してある。レコーダー分の支出もそこから出ているけれど、ぼくの計算では1年カラオケに通ってなお余りあるほどだ。だからそんな場所に居ただけれど…こんなことをしていた時、不意にアイツらの姿が目につかぶ。

（もしかして、ぼくが今やってることって…不良と同じ？）いや、実は彼らより劣っているのでは？

彼らは学校に居場所を求めて集まっている。それが善いことであれ悪いことであれ、彼らは学校には来ているのだ。制服を着くずし荒々しい言動で周りを威圧してはいたものの、彼らの中身はまだ中学生だった。学校に来たくないのか来たいのかも明確には分からないが、それでも居場所がある。

それに比べて、ぼくは？ぼくの居場所は？

問いかけに答えを見つけないよと思いを繰り返してみる。ぼんやりしていた脳が覚醒しぐるぐるとまわり始め、その回路から続々と芳しくない解答が浮かび上がった。

孤立無援。

「おい、何してんだ？」

「ふえっ!?!」

突然の低い声に慌てて視線を上げる。そこには全体的にゴツゴツした体格の、ちょっと怪訝そうな顔をしたスーツ男が立っていた。手には真つ黒なビジネスバッグを持っており、肌は白いが何となく文武両道で強そうなイメージがある。ぼくより高い身長でこちらを伺う様子は何だかアンバランスだ。…まるで、獣が人を見るような目。「あなたは?」

「俺か。うーん、そうだな…じゃあ、正義のヒーローってことで」「店長さん?」

「いや、だから…毎週日曜朝8時から12チャンネルで放映してる『仮面ツライナー』の主人公、正義のヒーローこと」

「……………」
「…あー…いや、ほら…ホントだよ?知ってる?あの仮面ってすっげえ呼吸辛いんだよ。だから俺の名前も仮面ツライナーになったんだよね。ほら、必殺技の電車みたいなスピードで放つ『ツライナーキック』も、高速移動で仮面が顔に当たって痛くて辛いなあってのと電車の快速のライナーってのをかけててね…」

「……………」
「…あーあー…はいはい、店長ですよ。ウソついてゴメンナサイ。けど、こっちは従業員専用入り口だぞ。あ、もしかしてバイトの面接でも受けに来た?」

「違っ」
「えー…と。それじゃあお客様?申し訳ないんですが、当店は午前11時からの営業となっておりますので…」

「…開けて」
「人の話聞いてたかつ!?!…いや、だからね、シナップスは11時開店なんだ。悪いんだけど片付けとかしなきゃいけないし従業員も揃ってないから、お客さんは入れられない」

「お願い…」

「っ…………!?!」

ぼくの必殺技、キラキラ上目遣い。学生時代の女装コンテストで鍛えた“男なら堕ちずにはいられない”と元親友から称されたほどの技。ちなみにその友達はえろげーとかいうものでこの技を思いついたとか言っていた。よく分からないけどかなり地雷の二オイがするので忘れることにする。

店長らしき変人（だっていきなり自分は仮面ツライナーって言い出すとか、変人だよな）はぼくのことを凝視していた。瞳孔がカツと開き唇は赤ちゃんみたいに半開きのまま、ちよっただけ頬が紅潮している。これが俗に言う一目惚れなのかな。

悪寒しか感じないけど。

「まあ、いいか。うん…可愛いしな」

…やっぱり。

「いいよ、ここから入りな。暖房つけたり掃除したりするからちよっとな待ってね」

「ん」

こうして無理矢理シナップスに入店したぼくは、彼の注意に上っ面な返事をして2階へ上がった。

何にも考えないまま道なりに進むと、廊下の最奥部に扉がひっそりと佇んでいるのが見えた。X2-1と札が掛けられている無表情のドアに近づく。中にはSAMの第3世代型に合わせたごちんまりとした部屋が待っていて、ぼくはその中へ忍び込むようにして入った。それなりにふかふかなソファと、1人か2人ぐらいしか立って歌えないスペース。部屋自体が狭いからだ。真正面には申し訳なさを力バーするかのよう横長の液晶テレビがドンっと置いてある。試みに近くのマイクの電源を入れて声出ししてみたら、意外と音響も良かった。過度に叫ばなければ歌いやすいはずだ。

「…ここにしようかな」

部屋を見回るつもりだったぼくはそのままスクールバッグをそこに置き、階下のカウンターまで行って彼を見つけた。接客用の制服を着終わったらしい彼が振り返って「うおっ!?!いつから居たんだ!

？」などと言つのは軽く無視する。

「X2-1を貸し切る」

「あー…フリータイムってことかな？」

「ん。お金、500円だよな」

「会員証は？」

ポケットから起動させた携帯を取り出し、画面メモに登録してある会員証を見せた。店長さんはそのままカウンターまで歩いて何度か機械を弄り、「ココにタッチして」とリーダーマシラしきものを指さした。そつとかざすとピツと高い電子音が鳴る。

「オーケイ。ホントはやつちゃいけないことだけど、なんか色々必死な顔してるから許しちゃおう。社長権限だ」

…どんな顔してたんだろう。

「ありがとう」

「…なんていうか、お前さん無口だな…。あ、ゴメン、名前ここに書いてくれ」

「ん」

入店表にササツと『葦原有希』と書いて、そのまま2階へ上る。すぐに「ちよつと待てえーい」と声がかかり、そうする気は無かったけど面倒そうな顔のまま振り返ってしまった。

「今から入るのか？せめて掃除とかしてからじゃダメん」

「自分でやる」

「…お、おう。じゃあ、終わったら呼んでくれ。機械の電源入れ」

「自分でやる」

「……………お…おう…。…じゃあ、ほら…最終チェックするk」

「自分でや」

「やつちゃダメだろっ！」

「…確かに。終わったら、呼ぶ」

「あ、ああ…頼んだぞ」

明らかにキョトンとしている彼を尻目に去る。ぼくは少しだけくすぐったいような感じに身を包まれ、口元が少し緩まらずにはいられな

かった。

(面白い人も居るんだ…)

それから毎日、彼と顔を合わせた。土日も親に「学校で自習する」だの「友達と遊んでくる」だのとウソをつき、シナップスにて従業員入り口で待ち合わせては上目遣い。その繰り返し。

昼と晩に料理を頼んだ時もいつも彼が来ていた。ぼくは必ずからあげ丼とジョッキミルク(M)を頼むのだが、まるでどこかから見ているのではないかと疑いたくなるくらい休憩中に持ってきてくれる。それについて言及してみたら「食分は奢りにしてくれた。それから」というもの、なんとなくぼくは自分が彼に懐いているような気がした。

「…シュンさん」

「おう、何だ？有希」

彼は笹野俊祐というそうだ。愛称はシュンだと言いつ張って聞かなかつたのでぼくは彼をさん付けで呼ぶことにした。ぼくの方と言えば、年下だし大柄な彼に『葦原さん』なんて気遣いされるのは気持ち悪いので『有希』と呼ばせることにした。ちよつと躊躇っていたのもつい先日までのこと、5月末の夜の帰り道、シュンさんはずいぶん朗らかに答えた。

「…あのさ」

「うん」

「……………」

「……………うん？」

「…何でもない」

「そうか」

シユンさんはとても、優しかった。

ぼくが何度か勇気を出して開いた口元を微笑を浮かべて見つめ、諦めて閉ざしても頷くだけで何も言わない。近くの駅に自転車を取りにいくだけのぼくとそこから住居へ帰る電車に乗るシユンさん。2人でゆっくり歩く道は、気づけば日々だんだんと短くなっている気がした。

(…どうして…ドキドキするんだろ…)

自分の胸に手を当てる。“悪いこと”をしたその数倍の緊張感が小さなカラダの中を駆け抜けつつあった。張り詰めた糸を何度も揺さぶられる感覚と共に顔は火照り、ぼくは思わずその事実を認めたくなくなってしまう。

(…ウソだ。だって、そんな あいつらと、同じだよ…?)

シユンさんの瞳を見上げてみる。ちよつと強面なクセに吸い込まれそうな黒に輝く双眸に、ぼくはどうすることも出来ず。

(…ぼくはあなたを、好きになつたみたいです…シユンさん…!)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9884x/>

牢獄。

2011年11月22日02時00分発行